スマイルな友情

「ごめんねやよいちゃん。でも最近ちょっと
目立ちすぎかな～って思うから」
「これを乗り越えてくれたら私達また友達に戻れますわ」
「あ、あと変身は解かんほうがええでー。身元バレすると
いろいろ面倒やからな」
口々にそういって仲間たちはやよいを置き去りにした。
「え？どういうことなの？」
突然の出来事に呆然とするやよい。
これより彼女の受難の幕が切って落とされた。

「すげー本当に来たぞ」
「ほ…本当に好きにしていいんだよな？」
「いいんじゃねぇの？他の四人がそう言ってたんだし」
どこか興奮を帯びた少年たちはおもむろに
やよいの衣装を脱がせ始めた。
「なっ、何するつもりなの。離してよ」
口では拒絶するものの、やよいは
少年たちを振りほどけないでいた。
気になっていたのだ、先ほどの４人の態度が。

「うほほ、ピースちゃんのムレムレスパッツー」
やよいが逡巡する間にも少年たちの行動は
エスカレートしていく。
「やめて！そんなとこ舐めたら汚いじゃない」
嫌悪感を覚えつつも彼女は振り切れない。
鈍い彼女でも薄々は気づいていた。
自分が4人の怒りを買ってしまったことを。
そしてこれが4人が自分に与えた罰であると。

「ふひぃ。ピースちゃんのスパッツまんこ美味しかったぁ」
気が行くまで舐め回した後、少年は口を離した。
「（股間…湿ってて気持ち悪い…）」
「（でも…これを乗り切ってみんなに許してもらわなくちゃ…）」
初めて性の対象として扱われた戸惑いや嫌悪。
しかしそれ以上に友達に仲間はずれにされてしまうという恐怖からやよいは抵抗を諦めた。

「うわーこれが本物のおまんこか」
「なんかビデオで見たのと違う、ってかちょっと変な匂いしねぇ？」
スパッツを引き裂かれ顕になったやよいの恥部に少年たちは釘付けだった。
「いやぁ…見ないで…」
抵抗はしない、そう決意しながらも彼らの好奇の目に晒され恥辱に震えるやよい。

「おおー中はなんかぐにぐにだな。
それに変な豆みたいのがあるぞ」
恐る恐るという感じに少年はそれを摘んだ。
「ひゃっ」
やよいは自らの身に走った衝撃に驚き
思わず声を上げてしまった。
「知ってるぜ。そこクリトリスっていうんだ。
女の人はそこを触られると気持ちよくなるんだってよ」
「へぇ…そうなんだ」
いいことを聞いたとばかりに少年は再び陰核をいじり始める。
「いや…もうやめて、これ以上は私…」

襲い来る未知の快楽に耐え切れずやよいは潮を噴いた。
「うわっ、こいつおしっこ漏らしやがった」
「きったねぇー」
まだ知識に乏しい少年たちは騒ぎ立てる。
しかし結果的に彼らはより一層やよいの肉体に興味を持った。
「でもなんかすごくエロいよな…」
「ああ…もっと続きをやりたいよ」
未熟ではあっても彼らは立派な雄だった。

「い…入れるぞ？」
じゃんけんで勝ち、最初の男の栄誉を授かった少年は自分のモノをやよいの秘所にあてがった。
「今更びびんじゃねぇよ。後がつかえてるんだからさっさとやれよ」
「いたっ…やめてよ。もう充分でしょ」
懇願するやよい。しかし彼らは行為に夢中で彼女の言葉など届いていないようであった。

「やった！入った」
幾度かの失敗の後、ついに挿入は成功した。
「いぎっ…いだ…い…」
破瓜の激しい痛みにまともな声さえ上げられないやよい。
しかしそんな彼女などお構いなしに興奮して腰をふる少年。
「うおおおっ。気持ち――。
自分でしてる時とは大違いだ」
「いっ…やぁ…痛いの…もう…やめて…」
蚊の鳴くようなやよいの声は誰にも届かない。

「あー気持ちよかった」
やよいの中にたっぷり欲望を吐き出した少年は
満足したようにペニスを引きぬいた。
「あ…」
やよいは破瓜の痛みと中出しされた
ショックに呆然としている。
「よし次俺な」
別の少年が陽気な感じに言った。
射精された精液を膣から垂らしながら
絶望的な気分をやよいは感じていた。

「（いやぁ…こんな犬みたいな格好…）」
四つん這いにさせられ羞恥に頬を染めるやよい。
こんな状況にありながらも、どうせやることは同じなら
もっと楽な体勢がよかったなどと考えているあたり
彼女が天然である所以なのだろう。
しかしやよいは理解していなかった。
思春期の少年の恐ろしい好奇心を。

「えっ…？」
あまりに予想外のことにやよいは素っ頓狂な声を上げた。
「待って、そこは違うわよ。間違ってるよ」
そう、今少年が指で広げているところはおしりの穴。
やよいの知る限りにおいてセックスとは
なんら関係のない場所であった。
「いいんだよここで。
俺はこっちに興味があるんだ」
やよいの静止も聞かず少年は肛門に
ペニスを沈めていく。

「うひぃっー」
普段排泄しているものが逆に這い上がってくるような
おぞましい感覚にやよいは奇声を上げた。
「うお…さすがにキツい…」
そう言いながらも腰を振る少年。
「うぇ…おぉ…う…」
注挿のたびに起こる排泄感にやよいはえづいた。
それでもお構いなしに腰を振り続け
やがて彼はやよいの中で果てた。

「うわ…ちんこがすげぇ臭い」
「当たり前だろ。うんこの穴に入れたんだから」
「こっちくんなようんこ野郎」
行なっている行為とは裏腹に歳相応の
やりとりを繰り広げる少年たち。
「で?次はだれいく?」
それでもまだ彼らの好奇心と性欲は
満足いってないようであった。

「ほら咥えてみろよ」
次に少年が要求してきたのはフェラチオだった。
「う…臭い…」
生臭いに匂いに吐き気を催すやよい。
もはや抵抗する体力のない彼女は吐き気を押し込め
そっと舌を伸ばした。
「うひゃっ。くすぐってぇ」
咥えるという行為への思い切りがつかず
チロチロと先っぽを舐めるだけのやよい。
「そうじゃなくてもっと口の中まで
突っ込むんだよ！」
少年は乱暴にやよいの頭を掴んだ。

「んぶっ！」
突如喉奥までねじ込まれもがくやよい。
「うぶっ…がはぁ…やめ…お…」
少年はそんなやよいを意に介さず
注挿を繰り返す。
「（息が…できない）」

「うっ、出る」
吐き気と酸欠によりあわや意識を
失いかけたところでやよいは開放された。
出された精液を吐き出し彼女は激しく咳き込んだ。
もやはやよいに出来ることは一刻も早く行為が
終わってくれるよう祈るだけだった。
そしてやよいの願いは
天に届いたかのように見えた。
「そろそろ飽きてきたな」
一人の少年がそうつぶやく。

「んじゃ、残りのやつら一気にやっちゃおうぜ」
やよいの希望は一瞬にして絶望に塗り替えられる。
「そうだな、穴は3つあるんだからソッチの方が早いよな」
そう言って少年は容赦無く肛門にペニスを突き刺した。
「うぐぇ…待って、一度になんてそんなー」
「早く終わるんだからピースちゃんもそっちのほうがいいでしょ?」
「いやっ!そんなの無理。もうやめてー」
やよいは最期の力を振り絞って抵抗した。

「もごっ…うぐぉ…」
抵抗も虚しくやよいの体には
3本の肉棒が突き立てられた。
こうなればあとはもう性欲の玩具となり
飽きられるまで弄ばれるだけである。

「うっ。」
最期の一組の少年たちが一斉に射精した。
「う…あ…」
やよいは細かい息をしながらうわ言のように声を漏らした。
「これで終わりだけどこの後どうすればいいんだ？」
「放置でいいんじゃね？あの4人がどうにかしてくれるでしょ」
「そうだな。んじゃこれからサッカーやろうぜ」
性欲を発散した少年たちは爽やかに去っていった。
遠ざかる足音に安堵しながらやよいの意識はそこで途絶えた。

「ん…」
やよいは不自然な体勢からの痛みに目を覚ました。
「おお～。目が覚めたんだねピースちゃん」
やよいはその声に聞き覚えがあった。
確か生徒指導をしている教師だ。
「驚いたよ。まさか君があんな
ことをする悪い子だったなんてね」
「え？」
今しがた目覚めたばかりの
やよいは状況を把握できないでいた。

「そんな悪い子にはお仕置きが必要だね」
信じられない痛みがやよいを襲った。
先程までの未成熟なものとは違う。
成熟しきった大人の暴力的な肉棒がやよいをこじ開けた。
「うぐあああああ」
獣のような、体裁などまるで取り繕う
余裕がない叫び声を上げるやよい。

「んふぅっ。これはきつくていいマンコだ。
さすが伝説のプリキュアは違う」
「うがぁああーぎいいい…ぐげっ…」
そしてやよいは気付いてしまった。
まだ悪夢は終わってないのだと。

「んほおおおお」
男は雄叫びを上げながら射精した。
「ふぅ。気持よかったね。ピースちゃん」
男は話しかけるが当然やよいにはそんな
余裕などない。

「ああ、ごめんよ。先生久しぶりだから
ハッスルしちゃったよ」
ご満悦といった様子で一方的に男は語りかける。
「でも大丈夫。次は気持ちいいことするからね」

「な…なんなの?」
目隠しをされ机の上に縛られたやよいは
不安そうに問いかける。
「どうせガキどもは猿のように腰振ってた
だけなんだろう?だから先生が本当の
快楽ってやつを教えてあげるんだよ」
「いや…もういいです。
お家に帰してください」
視界が閉ざされた恐怖に震えながら
やよいは懇願した。
「大丈夫だよ。もう少ししたら
お家なんて帰りたくなくなるからね」
怯えるやよいを楽しそうに視姦しながら
男は道具を取り出した。

「いやあああああ」
やよいに取り付けられたバイブとローターが
一斉に振動し始める。
「いやあ、なんなのこれ！なにしてるんですか先生!?」
彼女に道具の知識などあるはずもなく
体を襲う未知の刺激にやよいは悶えた。
「気に入ってくれたみたいだね。
全身おまんこになったみたいに
ひくひくしてるよ」
男はよりー層嬉しそうに
下品な笑みを浮かべている。
「いやっ！抜いて！抜いてよぉー」
やよいの叫びが虚しく響いた。

やよいへの責めは一時間以上にも及んでいた。
すでにやよいには刺激に反応する体力は
残っていなかった。
それでも男の責めは執拗に続き、やよいは
何度も何度もイカされ続けた。
「ほらピースちゃん、気持ちいいだろ？」
男は優しげに問うた。
「あひ…気持ちいいれす…」
理性が飛び呂律の怪しくなったやよいが答える。
「ならもう帰りたくないよね？」
男は愚劣で優しげに問うた。
「ふぁひ…ひゅっとこほままがいいれすー」
大量に潮を吹きながらやよいは答えた。

「う…わぁ…」
再び男の太い肉棒がやよいの中に侵入する。
しかし今度はやよいに苦痛の色はなかった。
「んちゅ…ふ…れろ…」
やよいは舌を絡ませ積極的に快楽を求めた。

「僕のちんぽ気に入ってくれたようだね」
「うん！私先生のおちんぽ大好き」
男はやよいの返答にニヤリとした。
「ならこんなすばらしいちんぽはみんなに
教えてあげないとね」
「みんな…に…？」
この男はやよいがこうなった
そもそもの理由を知らない。
しかしその提案はやよいにとって天啓だった。

「そう…だよね。このことを教えてあげれば
みんなだって許してくれるよね。
だってこんなに気持ちいいんだもん」
朦朧とする意識の中やよいはそんな妄想を
抱いていた。

「じゃあみんなを紹介してくれるね」
「うん！」
やよいは元気よく答えた。
「ようしいい子だ。ご褒美にザーメンをやろう」
男は射精し、そして休むことなく注挿を再開した。
その行為はやよいが気を失った後も続いたという。